

CONTENTS

TOPICS

- 1 働き方改革セミナー<イクボスから拡げるワークライフバランス>
- 2 産業論 ダイバーシティセミナー
- 3 愛知県主催理系女子応援事業<いいかも!リケイ>
- 4 OG 伊藤恵利氏講演会
- 5 英語論文・プレゼンテーションのためのオーダーメイドセミナー
- 6 女性研究者・技術者の会ランチミーティング

- 7 女子学生向けロールモデル集
<共に創る未来へ>

REPORT 女性が拓く工学の未来 受賞者の声

COLUMN ワーク・ライフ・アンバランス

TOPIC 1 働き方改革セミナー<イクボスから拡げるワークライフバランス>

2019年2月13日、「働き方改革セミナー<イクボスから拡げるワークライフバランス>」を開催しました。このセミナーは、2018年度に行った「名古屋工業大学イクボス宣言」の実践および教職員のワークライフバランスに考慮した働きやすい環境の実現を目指す「働き方改革」推進のため、ダイバーシティ推進センターが主催し、学長ら役員、全部局長、管理・監督教職員等45名が参加しました。

鵜飼学長の開会挨拶の後、内閣府地域働き方改革支援チーム委員（株式会社東レ経営研究所主任研究員兼務）の渥美由喜氏より、ダイバーシティ推進の理念や働き方改革を成功に導くマネジメント等について講演いただきました。働きやすく、働き甲斐のある職場作りや具体的なイクボス実践術等のアイデアに、受講者は熱心に耳を傾けていました。

講演後の意見交換では、次世代の育成方法や部下の評価、ワークライフバランスに考慮した働き方について忌憚のない活発な質疑応答が行われ、今後の「働き方改革」推進にとって大変有意義な機会となりました。



TOPIC 2 産業論 ダイバーシティセミナー

本年度より、全学必修科目である「産業論」にダイバーシティ教育が導入されました。「産業論」は産業と技術の関わりを学びながら、技術者の責任と経営感覚の習得を目的とする科目です。2年次の全学生が、産業界で活躍する講師から、ものづくりの場におけるダイバーシティの重要性を学びました。社会工学科では、アビームシステムズ株式会社執行役員の谷口千佳氏が女性技術者としてのご自身の歩みと若手技術者の育成についてお話しされました。また、生命・応用化学科、物理工学科、情報工学科、電気・機械工学科では、株式会社デンソーよりセンサー開発の技術者である小林由佳氏と、同社OBで長年人材育成やダイバーシティ施策に携わってこられた鈴木康利氏が、女性技術者のキャリア形成上の課題とシニア活躍推進の取組についてお話しされました。受講生の多くが、ワークライフバランスや各世代ごとの役割の差異を踏まえて、技術者としてのキャリア形成を考える視点を習得しました。



名古屋工業大学ダイバーシティ推進センター

TOPIC 3 愛知県主催理系女子応援事業 <いいかも！リケイ>

2018年12月15日愛知芸術文化センターにて「いいかも！リケイ」理系女子応援事業の成果発表会が開催されました。

本学からはパネルディスカッションの一員として加野特任助教が登壇し理系進路に関心を持つ参加者に向け、ダイバーシティ推進の観点から、工学分野に女性が進む意義を話しました。また、PRコーナーに大学案内、ロールモデル集等を展示しました。

約230名の参加者は、ほとんどが保護者や学校関係者で占められ、女子の理系進学に対する社会的な関心の高さが窺われました。内閣府「理工系女子応援大使」の玉城 絵美さん（早稲田大学 創造理工学研究科 准教授・理工系ベンチャー H2L 株式会社 創業者）による基調講演、中高生の成果発表、企業で働く理系女子のロールモデル紹介、パネルディスカッション、という内容で、女子中高生へ向けて理系の魅力を力強く発信する発表会となりました。



TOPIC 4 OG伊藤恵利氏講演会 (株式会社メニコン)

2018年11月17日、第3回オープンキャンパスにおいて、株式会社メニコンで研究開発に従事する傍ら、本学の特任准教授を兼務されている伊藤恵利氏に、NITechホールにてご講演いただきました。なお、伊藤氏は本学OG会である鶴桜会の副会長も務められ、工学のダイバーシティ推進にも積極的に貢献されています。

高分子化学を専門とする伊藤氏には、なぜご自身がその分野を選択し、いかにして大きなやり甲斐を見出して今日の研究成果へと発展させてきたのかについて、約1時間にわたってお話いただきました。

企業における研究開発の醍醐味やそれにまつわる苦勞、最先端の研究成果の紹介など、大変インパクトの強いメッセージを発信してくださいました。

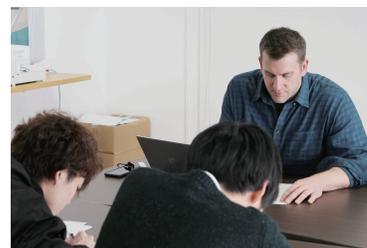


TOPIC 5 英語論文・プレゼンテーションの ためのオーダーメイドセミナー

ネイティブスピーカーの科学者の講師から具体的なアドバイスを受けられ、また受講者の発表や投稿に合わせて受講日を選べる大変好評なセミナーです。受講者は事前に相談内容を伝え、原稿に事前に目を通してもらえるため、きめ細やかな指導を受けられます。

2018年は全7回開催され、受講者の論文やプレゼンテーション原稿を題材に、単語の選び方、文法、アブストラクトの書き方、論文の構成、図表タイトルの付け方、プレゼンテーションの技法について講義が行われました。

受講者からは、なぜその表現を選ぶとよいのかという具体的な指摘をもらえたり、自分では普段選ばない表現や単語の用法を教えてもらった、聴衆に伝わりやすい表現方法を習得できた、という声が寄せられています。



TOPIC 6 女性研究者・技術者の会 ランチミーティング

2018年12月4日、11号館3階のi-cafeにて、本年度4回目のランチミーティングを開催しました。

今回は8名の女性研究者・技術者と、鶴飼裕之学長、内匠逸理事にご参加いただきました。話題提供として、初参加である牧野友紀特任教員に研究紹介を行っていただきました。ご自身の経歴と研究テーマである「食とコミュニティ」について、東北地方の被災地での食の「取戻し」や「第3の居場所と食」を中心に、イギリスのPUBや東北の直売所、名古屋の喫茶店、学内の休憩スペースなど日常に密着した例を挙げてお話いただきました。まさにランチミーティングにぴったりのトピックで、多くの質問や感想が寄せられました。その後、学長からご挨拶をいただき、会食を楽しみながら様々な話題で盛り上がりました。



TOPIC 7 女子学生向けロールモデル集<共に創る未来へ>

現役女子大学生に向け、工学系大学院進学や就職してからのキャリア形成についてロールモデル等を通じて案内するとともに、女子中高生に向け、工学系大学生活やその後の進学、キャリアについて掲載するパンフレット「共に創る未来へ～名工大の女子学生・女性研究者からのメッセージ～」を発行しました（発行：ダイバーシティ推進センター、協力：キャリアサポートオフィス）。未だ少ない女子学生の工学系大学・大学院への進学のきっかけや不安解消、さらに、多くの女子学生が工学系の研究職の楽しさややりがい等を感じ、工学の担い手として、充実した未来を思い描くことができるよう、先輩（大学院生、技術者、研究者）のさまざまな活躍の様子を紹介しています。



REPORT 女性が拓く工学の未来賞 受賞者の声

女性が拓く工学の未来賞は、活躍が期待される本学の若手女性研究者の研究意欲を高め、将来の学術研究を担う優秀な女性研究者を育成することを目的としています。2018年11月7日に開催されたダイバーシティ推進シンポジウムで、優秀賞1名、奨励賞1名の受賞が発表されました。



武藤 敦子 准教授
情報工学科
知能情報分野

女性が拓く工学の未来賞優秀賞を頂き、誠に光栄に存じます。多くの女性研究者が、自身の研究キャリアを継続させるために結婚・出産などのライフイベントに躊躇し、また、その後のワークライフバランスの維持に困難を感じている方も多く中で、私が研究と育児を両立できていることは、周囲の皆さまのご理解・ご支援の賜物と感謝しております。特に、共同研究者の先生には、研究・教育へご指南頂くだけでなく、育児との両立に対して日頃よりご配慮を頂いております。また、ダイバーシティ推進センターの研究支援員配置などのご支援にも深く感謝申し上げます。今回頂きました賞の名に恥じぬよう、今後もより一層研究・教育に励み、工学を志す女子学生の目指す姿となるよう日々精進してまいります。この度は、誠にありがとうございました。



中居 楓子 助教
社会工学科
環境都市分野

この度は、女性が拓く工学の未来賞をいただきありがとうございます。改めて、自分を研究者としてのスタート地点に立たせてくださった京都大学在学時の先生方、長年フィールド研究でお世話になっている高知県黒潮町の方々に感謝したいと思います。昨年まで、私は津波避難シミュレーションを使った地域コミュニティの津波避難計画づくりに関する研究に取り組んでいました。研究室でのシミュレーションとフィールドワークを行き来するという研究スタイルでしたが、学生時代には、どちらも中途半端で学術的な成果が得られないことへの焦りがありました。しかし、現在落ち着いた研究環境に身を置く中で、長期的な視点で研究を考えられるようになり、この研究スタイルを維持する先に面白いことが見えてくるのではないかと、思えるようになりました。名工大の素晴らしい環境に感謝しつつ、これからよい成果を出せるように頑張りたいと思います。





加藤 正史

1998年 名古屋工業大学卒
 2003年 同大学大学院修了 博士(工学)
 2003年 名古屋工業大学 助手
 2008年～現在 名古屋工業大学 准教授(その間リトアニア国
 ビリニュス大研究員、名古屋大学客員准教授 兼任)

第8回 ネガティブイベントを乗り越えて

紆余曲折の装置開発

最近、私の研究成果を、日刊工業新聞に報道いただいた[1]。今回は趣向を変えて、半ば自慢話になるが、当該成果のストーリーを紹介したい。この研究成果は、装置開発に関わるものであるが、その過程は公私ともに一筋縄ではいかなかった。

国家プロジェクト・人との出会い

開発する装置のアイデアは2010年ほどから私の頭の中に存在した。ただし、装置作製に必要な予算が存在せず、3年ほど頭の中に留まっていた。その後、シリコンカーバイド(SiC)という半導体材料の国家プロジェクトが、以前からのプロジェクトを踏襲しつつ、2014年度から新たに始まることになった。その際、私にも新規研究アイテム募集の話を受けた。プロジェクトメンバーに私のアイデアを提案したところ、幸いにも採択され、国家プロジェクトのメンバーとして装置開発を実施することとなった。

この装置開発を始めるタイミングで、偶然(飲み会ともいいます)カスタムの光学装置を作っている企業の方と知り合いになった。2014年5月のことである。装置の仕組みについて相談してみたところ、当該企業の技術と非常によくマッチすることがわかり、私が仕様を提案する形で、設計・作製をお願いした。当初は自分で設計しようと思っていたのだが、非常に助かった。

ただし、当然設計・作製には時間がかかる。設計いただいている間に、私の身に降り掛かったのは、亡妻の重病であった。看病の期間、授業を同僚にお願いし、研究室活動は最低限のミーティング程度にし、ほとんどの時間を病院通いに費やした。ただし、メールで対処可能な仕事は遠隔で対応し、開発装置の打ち合わせ、部分的な納品の際には部分的に出動した。2014年度予算での作製であったため、開発を先延ばしにすることは不可能であった。そして2015年1月、妻は没する。悲しみを乗り越えて、打ち合わせをしつつ、動作するものを納品いただいた。2015年3月のことである。

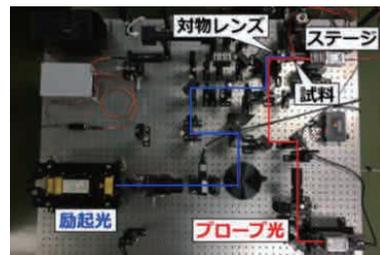
全くの机上のアイディアを現実のものとする時に、いきなり上手くいくことは少ない。当然ながら複雑な原理を組み合わせた装置は、いきなり

使い物にはならない。ここで遡って2014年の夏、エレベータの中で偶然乗り合わせたある学生から大学院進学で困っている、という相談を受けた。ならば来年度から私の研究室に来なさいと誘い、彼を2015年4月からの研究生として受け入れた。一方で、研究生受け入れとほぼ同時期に、当時の男女共同参画センターの方に研究支援員制度をご紹介いただいた。そこで彼を研究支援員として雇用し、装置改善に従事してもらうこととした。結果として、その学生は1年間を研究支援員の立場で、その後の2年間を修士の学生の立場で、当該装置の改善に深くコミットし、上記企業の方の協力を得ながら、装置を使えるものに仕上げた。

子供の送り迎えをしながらの仕事では、私が直接装置を扱う時間は限られる。その点、学生と企業の方のコミットの深さは、大変ありがたかった。そして国家プロジェクトの終わる今年度(2018年度)、報道発表に足る、産業界に提供できる成果が得られたということである。

ネガティブイベントを乗り越える

人生において、ネガティブなイベントは往々にして突如発生する。この経験は、そのようなイベント時に助けになるのは信頼できる仲間であることを、私に再確認させた。私のこの経験は、装置開発という特殊な仕事であり、その点では一般化できるものでないだろう。しかしながら、ネガティブイベントを乗り越え成果を出せたという点で、読者の皆様で紹介する意味のあるストーリーであると思っている。



[1] 2019年1月10日 日刊工業新聞25面 『SiC結晶、電気特性を非破壊測定 名古屋工大』

発行

名古屋工業大学ダイバーシティ推進センター

2019年3月発行

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町 E-MAIL | diversity-crew@adm.nitech.ac.jp

TEL | 052-735-5121, 052-735-5279 URL | http://www.nitech.ac.jp/diversity/

文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」